

授業形態	講義	科目名	心理学概論B	必選区分	必修
開講学科・学年	大心1年		受講者数	約100名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他（ ）			
どのような方法を取り入れたか	オムニバス授業の5コマを担当する。1回目は、DVD「あなたの子育て私の子育て」(大阪市市民局)を視聴した後、子育てのしんどさ、子育てにお金とエネルギーをかけること、共働きの子育て、里親家庭の子育てなど6間についてプリントにある設問に学生が自分の考えを書いたあと数名に発表してもらい、教師の考えを述べることを繰り返す。2回から4回は、子育てと発達に関する臨床心理学の基本をプリントに学生が穴埋めをしてゆく形で学んでゆく。その中でも学生に答えを考えて発表してもらう。第5回目には、「いじめ」について考えてもらうためにNHKのドキュメントDVDを視聴したあと、プリントの設問に学生が考えを書いてから、数名ずつ発表してもらい、そのあとで教師の考えを述べる。				
取組みの効果	プリントに自分の考えを書いたり、発表させたりすることで、緊張感が生じ、自発性が求められる。DVDを見せると暗くなるので学生が眠ることがあるが、身近な興味をひき易いテーマの映像であることと、映像を短く区切って、設問に移り、考えを書いてもらうので、居眠りする学生はほとんどいない。さまざまな考え方があってよいことと、臨床心理学的な知見から教師はそうに考えるのだ、ということが学べるようにした。				
今後の課題	学生に穴埋めを求めるプリントを用意して配布することで、様々な事項の理解と習得に能動的になることはできる。しかし、すべてのテーマについて、適切なDVDを用意したり、興味をひくような設問を作ることは困難がある。学生に考えてもらう設問が作りにくいテーマも存在する。				

授業形態	講義	科目名	社会心理学	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約130名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>授業中に3回の小テストを実施し、それぞれ15点の配点をした(合計45点となる)。各小テストは翌週に返却し、その後、任意で提出するレポートの得点を合わせて最大15点となるようにした。したがって、小テストが0点であっても、レポートで15点を取れば、その回の得点は15点となることになり、また、小テストの得点がそれなりに高ければレポートを提出する必要はないものであった。</p> <p>レポートは、対応する小テストの出題範囲である授業内容(概ね4~5回分)を手書きでレポート用紙にまとめるものであった。内容は、原則として、授業内容を要約した上で、その部分に関連する自分自身の身近な具体例をまとめるものであった。</p> <p>授業時間外に、授業内容について考える時間を取ることを目的としていたため、評価の対象は、主に具体例の記述量とした。誤った解釈によって記述されている場合は、その旨をコメントするだけに留め、減点対象とはしなかった。また、具体例の記述は、少数の事例について丁寧に考察をし、記述の分量を多くするやり方であっても、それぞれの事例に対する考察は少ないが、取り上げる事例を多くするやり方であっても、いずれでも優劣はつけなかったこととした。</p>				
取組みの効果	<p>第1回小テストでは、受験者128名中91名(71.1%)、第2回では129名中88名(68.2%)、第3回では130名中87名(66.9%)がレポートを提出した。各小テスト単独の平均点は、第1回から7.8点(標準偏差4.1)、10.0点(同3.6)、9.7点(同3.5)とさほど低いわけではなかったにも関わらず、3分の2以上の学生が15点満点を目指してレポートをまとめ、提出していた。</p> <p>これらの結果より、授業時間外学習を促進する取り組みとして、十分な効果を持つものであったと評価することができる。</p>				
今後の課題	<p>迅速な小テストの採点と返却、及びレポートの採点やコメントのために時間の確保が必須であり、教員の時間的負担が非常に大きい。</p> <p>これらの負担を軽減するために、μ Cam等の学習支援システムを活用する方法が考えられる。特に、学習支援システムを使用すれば、小テストの採点と返却は非常に容易になる。一方で、現在のところ、約130名が同時にテストを受験可能なコンピュータ室はなく、環境面での制限から実現は難しい。</p>				

授業形態	講義	科目名	地域福祉論 A	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>「福祉教育」は地域福祉の推進において重要な手法であり、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験にも出題されることが多い。しかし、教科書では福祉教育の概念、目的、背景など抽象的な表現・内容にとどまっており、これまで漠然とした理解になっていたと思われる。他方、大部分の学生は小中高校時代に、総合的な学習の時間などを通して、何らかの福祉教育体験をしている。そこで、本授業ではこれまでの学生の自らの経験を他の地域の学生と共有した上で、福祉教育プログラムの企画・立案の基礎力を身につけることをめざし、福祉教育に関する理解を深める取り組みをおこなった。授業の流れとしては①福祉教育の概念と方法理解のための教科書・プリント学習、②課題提示と福祉教育プログラムの参考事例による小グループディスカッション、③個別課題としての福祉教育プログラム案提示と小グループでのディスカッション、④各グループによるプログラム案の中間報告と発表用の模造紙完成、⑤プログラムの発表会と評価（卒業生である社会福祉協議会の専門職員、銀行員による専門的評価と相互評価）、⑥個別学習・グループワーク・プレゼンテーション・評価後、各自がさらにプログラム内容を修正したものをレポートとして提出、などである。本レポートはシラバスに明示していた前期成績評価の対象である。</p>				
取り組みの効果	<p>本学科では2年生から社会福祉コースに分かれるため、2年生前期の学生はまだ互いをよく知らない状況である。そこで講義型授業であっても協働学習を取り入れ、グループワークを実施するようにした。各回のふりかえりシート、コメントカードから効果として次のようなことが挙げられる：①自分の居住地/出身地の地域特性とともに学生間の相互理解・コミュニケーションが進んだ、②過去の福祉教育経験を共有した上で立案したので具体的な支援方法と過程を体得した、③プレゼンテーションを通して人前で話すことに慣れる場となった、④社協職員である先輩が授業に参加し、専門的にコメント・評価してくれたことでモチベーションが高まった、など地域分野への関心、キャリア支援にもつながったといえる。</p>				
今後の課題	<p>最初は固定式の教室であったので、途中から教室変更をおこない、図書館6階のグループワークが可能な教室で実施した。しかし、図書館内でのパソコンの貸出が9時からであったので、1限目の授業時間が90分確保できなかった。そこで学生がグループごとにパソコン利用することは断念した。加えて8時半から教室の冷房を入れても非常にむし暑い状態が続き、授業中、空調管理に教員が動き回る必要があった。またワイヤレスマイクの故障などのトラブルもあり、学生の集中力を欠いてしまうこともあったので、発表後はもとの固定式教室に移動した。授業が土曜日1限目であったので専門職の卒業生にも参加してもらえた。役割モデルとして効果があつたがウィークデイの授業では難しい。</p>				

授業形態	講義	科目名	ソーシャルワーク論 I A	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>講義内容の理解を深めるために、また授業に積極的に取り組むように、演習を積極的に取り入れている。演習における作業は、最初は個別で行い、その後グループで意見交換したのち、挙手もしくはランダムに学生を指名して発表させる。</p> <p>それ以外にも、学生に質問をして発言を促すことを日常的に実施している。</p> <p>学生が発言した際、明確な解答がある場合を除いて、学生の発言内容を肯定的に受け取るフィードバックを行った。</p>				
取組みの効果	<p>一方的な講義の場合、何人かは寝てしまうことがあったり、学生の集中力が切れていることがあったが、演習を取り入れることで、講義内容の理解が深まるとともに、授業にも積極的に参加するようになった。また、発表もよくさせるが、当初は発言することに躊躇していた学生も、否定的に捉えられることがないことがわかると、比較的抵抗なく発言できるようになった。そのうち、「これはランダムに発言を求められる授業だ」と学生も受け入れてくれ、発言することに慣れた様子であった。</p>				
今後の課題	<p>限られた授業時間の中で演習を取り入れるのはかなりの時間を必要とするため、90分をどのようにマネジメントするのが最も効果的かは現在も模索中である。声の小さい学生もおり、マイクを使用することが望ましいが、マイクを回している間がロスタイムとなり、間延びしてしまいがちになることや、授業の進行が遅れるというデメリットがある。マイクを回す時間をなくそうとすると、順番に発言を求めることになり、学生の緊張感が薄れてしまうというデメリットになる。理想は一人ひとりにマイクがあることだが、少なくとも学生が使用できるマイクが3～4本あれば、授業の進行がスムーズにいくのではないかと考えている。</p>				

授業形態	講義	科目名	カウンセリング心理学	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約140名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>双方向型の授業：講義の最後に、講義の質問コメントを記入させ、次回の授業の冒頭に、各自の疑問に答えるようにするとともに、学生の感想を参考に講義内容を調整・改善するようにした。また、積極的に視聴覚の教材を調査し講義の説明時に使用した。</p>				
取り組みの効果	<p>理解を深める、意欲関心を高めることに貢献したことが、授業の感想に表れていた。</p>				
今後の課題	<p>学習態度を良くする取り組みについて工夫する。</p>				

授業形態	講義	科目名	犯罪心理学	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約150名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>(1) 視聴覚教材(ビデオ、DVDなど)を取り入れている。 毎回ではないが、授業の後半に、20～30分程度の視聴覚教材(ビデオ、DVD)を提示し、解説している。材料は、一般に放映されたテレビのドラマやドキュメンタリー(の一部)などである。解説を加えつつ、視聴覚教材を提示することで学生の理解を深めるとともに、興味・関心を高めることを図っている。</p> <p>(2) 出席票の裏面に質問やコメントを記載するように促している。 毎回出席票を配布しており、裏面に質問やコメントを記載するように促している。質問やコメントがあれば、次回の授業でできるだけ取り上げ、フィードバックしている。</p>				
取組みの効果	<p>(1) アンケートの結果も好評であり、効果が上がっていることがうかがわれる。2014年度後期の授業アンケート(履修者149名中、回答者数82名、回答率55%)で、「授業の良い点を具体的に述べてください」との設問に個別の記載のあった29件のうち、20件が視聴覚教材の提示を「授業の良い点」として記載している。記載例の一部は以下である。 (記載例) No1「ビデオがおもしろいです」; No2「授業後半にビデオをみせて貰えるので、最後まで集中して講義に臨むことが出来ました」; No3「映像でみせてくれるので、わかりやすい」; No4「犯罪のビデオを見ることで興味もてた。ビデオがおもしろい」; No5「ビデオを見ることで具体的に理解できて良いです」; No6「ビデオなどでわかりやすい…(以下略)」; No9「ビデオを見ることにより、より分かりやすく理解できた」; No12「ドキュメンタリーの映像やリアリティのあるドラマなど、実際の現場の話を知れてよかったです」; No13「映像を見ることで、より理解しやすくなる。内容も興味深いものも多く、説明もおもしろく、授業に入りやすい」; No15「興味がわくようにビデオを見せてもらえる所」など</p> <p>(2) アンケートの結果によるかぎり、さほどの効果は上がっていないのかもしれない。「授業の良い点を具体的に述べてください」との設問に個別の記載のあった29件のうち、出席票裏面を用いてのコメントや質問のことを「良い点」として指摘したものは4件であった。記載例の全部は、以下である。 (記載例) No7「生徒の質問に答えてくれる。…(以下略)」; No8「紙に書いた質問に答えてくれる」; No10「意見を聞いてまわって下さったことです」; No21「授業の初めに質問に答えてくれて、前回のフィードバックをしてくれる」</p>				
今後の課題	<p>(1) についてはほとんど否定的な評価はないので、今後とも継続していきたい。(2)については、質問したいことがあっても発言しない学生が多いのが現実であるから、あまり好評ではないのかもしれないが、今後も継続していくつもりである。</p>				

授業形態	講義	科目名	心理学英語文献講読	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約120名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>授業は3グループに分かれて、担当グループはおよそ40名であった。このことから、出席簿順におよそ5名ずつで1班を作り、班ごとに英訳を行った。時間を制限し、メンバー各自による単語確認、本文の和訳を行い、次にグループ訳を作成した。毎時間の最初に前回のグループ訳を全グループ分印刷するとともに、訳に対するコメントをつけ、誤訳があった場合にはなぜそのようになったのかを、全員に対して説明し、同様の誤りはどのような時に起きるのかについて考えさせた。各グループの訳は、ベスト翻訳、グッド間違い、など必ず良い点と改善点を含めた形でフィードバックし、グループ間の良い意味での競争心を高める努力をした。また、訳した論文がどのような他の研究と関係しているのかについては口頭で述べ、関連論文を板書して時間外学習につなげた。</p>				
取組みの効果	<p>授業に対する動機づけは高くなったと思われる。</p>				
今後の課題	<p>このような授業を展開するためには、周到な準備が必要で、補助者が必須と思われる。</p>				

授業形態	講義	科目名	心理学英語文献講読Ⅰ・Ⅱ	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約140名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他（ ）			
どのような方法を取り入れたか	<p>①前期に開講される心理学英語文献講読Ⅰにおいて受講者全員にプレースメントテストを実施し、その結果によって習熟度別に3クラスに分けた。後期に開講される心理学英語文献講読Ⅱでは、平成25年度までプレースメントテストを実施していなかったが、平成26年度より導入した。</p> <p>②心理学英語文献講読Ⅰでは、英語論文そのものではなく、基礎的な心理学の知識を理解することができる教材を選択し、基礎的用語を集めて「心理学英和・和英基本用語集」を出版した。</p> <p>③毎回の授業ごとに単語の暗記・ノート提出など、授業時間外で取り組むべき課題を課した。</p>				
取り組みの効果	<p>①前期だけでなく後期の授業においても、習熟度別に授業が実施されることによって、学生の授業内容の理解度は向上している。</p> <p>②一般的な辞書では専門用語語が見つからない単語について、用語集を利用することによって、英語論文の理解が高まった。</p> <p>③単語の暗記・ノート提出を課すことによって、授業中の講義内容への集中力が高まった。</p>				
今後の課題	<p>①プレースメントテストを実施するだけでなく、最終授業日にほぼ同問題の達成度確認テストを行ない、実力の向上を測定しているが、「授業目標」の視点から、各テスト内容の妥当性について確認することが必要である。</p> <p>②英語が必修科目となった後の学生の基礎力を考慮し、「心理学英和・和英基本用語集」の改訂が必要である。また、毎年、授業担当者自身が作成する教材にかかる時間と労力が大きく、効率化を図ることが必要である。</p> <p>③心理学英語文献講読ⅠおよびⅡの授業担当者は、年度によって異なっている。各担当者による教材・指導法の違いが、授業効果に与える影響を比較できていない。検討が必要である。</p>				

授業形態	講義	科目名	精神保健福祉制度論	必選区分	選択
開講学科・学年	大心2年		受講者数	約60名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>精神保健福祉制度論とは、生きづらさ（生活の困難）をもった人々や精神障害者等のマイノリティーに対する社会の仕組み・サービス、歴史について理解を深める授業である。また、この授業は、精神保健福祉士養成の一連科目の一つであり、厚生労働省によって学生に教授すべき内容が決まっており、こちらの裁量で授業内容を大きく変えることが出来ない科目でもある。</p> <p>一昨年度までは、教科書に沿って必要項目を随時説明していく講義スタイルを取っていたが、昨年度より、授業開始5分はウォーミングアップの時間を設けることにした。</p> <p>精神障害、発達障害、摂食障害や犯罪被害者、同性愛者、性同一性障害、自殺未遂者、自死遺族等の既に刊行されている当事者メッセージ・ポエム・写真等を視覚的に学生に見せて、そこから、それらの障害者・特性についての近年の施策・法律の動向や、新たな疾患の疾患分類や、近年の見方・考え方などについて補足するものである。できるだけ、ニュース等で取り上げられた事案なども紹介することを毎回授業開始時に行った。また、同時に学生らのもとまでマイクをもっていき、意見を複数名に求めた。</p>				
取組みの効果	<p>単に、知識を提供する授業を1時間半行うよりも、学生の授業に対する意欲・関心は上がったように感じられる。実際、居眠りをする学生が毎年複数名いたが、この授業では居眠りはほとんどなく、私語もほとんどない。メリハリがついたように評価をしている。</p> <p>実際、昨年度の授業評価においても、授業内容自体よりも、このウォーミングアップや、余談と称して、ウォーミングアップで扱ったテーマに関連した話をすることに学生らが関心を示し、今後も続けてほしいとのコメントがあった。</p>				
今後の課題	<p>学生たちの意欲や関心を高めるには、単に知識の詳細を伝えるだけではなく、まず教員に関心を向けさせることが大切だと痛感している。そのためには、視覚的に学生に訴える資料準備や、近年の社会的問題への賛否両論の意見等、教員が読み込み、学生に簡便に伝えていく必要がある。</p> <p>日々の仕事に追われ、学生に伝える際に、よりの確な資料や近年の最新の事情を伝えることができていない部分もあるので、教員自身が余裕をもって社会を眺めることができるようになることが今後の課題だと思っている。</p>				

授業形態	講義	科目名	レクリエーションの企画と運営	必選区分	選択
開講学科・学年		大心2年		受講者数	約30～50名
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>地域の団体等と連携して、学生が行事を参画する形態を授業に取り入れた。具体的な流れは、次のとおりである。</p> <p>(1) 参画した行事</p> <p>① 地方公共団体(市)が主催する『わいわい子どもフェスティバル』に武庫女コーナーを設けてもらい、そのコーナーの企画と運営を行う。市との事前打合せに参加した際に受けた実行委員会の助言をもとに、授業中に企画の打ち合わせ、用具の準備、リハーサルを実施した。当日は、学外引率願により担当教員が引率した。</p> <p>② 認定NPO法人が主催する『防災ふれあいウォーク in 西宮』に武庫川女子大学として協力し、その企画と運営を行う。主催者との事前打合せをもとに、授業中に企画の打ち合わせ、必要な下見や用具の準備、リハーサルを実施した。下見や当日は主催者が保険加入により対応した。</p> <p>③ 社会福祉法人が訓練プログラムとして実施する『選択レクリエーション』に武庫女交流会を設けてもらい、その交流会の企画と運営を行う。交流会は本学にて3回実施した。1回目と2回目は第1体育館にてスポーツや身体運動を用い、3回目は教室でできる活動を用いることとした。</p> <p>(2) 実践を通して学ぶ</p> <p>① 疑似体験ではなく、実際に地域の子どもたちやその保護者、地域住民、知的障がいを持つ利用者と支援員と実際に関わることにより、机上の学びを体験する機会を提供する。</p> <p>② 運営後、必ず「振り返り」を実施し、良かった点と改善点を導き、フィードバックするプロセスまで体験的に学習する。</p>				
取り組みの効果	<p>(1) 地域における実践的な企画により、机上の学びを身につけることができる。</p> <p>(2) 教育推進宣言にもとづく効果</p> <p>① 主体性： 学生が相互に自ら参加するため達成感が高い</p> <p>② 論理性： なぜその企画をするのか、その企画から参加者が学ぶことは何かを理論立てて企画を考えることが身につけられる</p> <p>③ 実行力： 疑似体験ではなく、参加者がいるため、実際に企画を運営する力を身につけられる</p> <p>(3) 社会人基礎力と言われている</p> <p>① 考える力</p> <p>② チームワーク</p> <p>③ 実行力</p> <p>を養うことができる。</p>				
今後の課題	<p>(1) 地域の団体等による行事は日程が土日に決まっているため、学生による参画が負担になることもある。シラバスに記載し、初回授業でも説明している。</p> <p>(2) 市の行事では、学生が交通費を自己負担する必要がある。鳴尾を起点に往復交通費補助が教育後援会から可能であるか。</p>				

授業形態	講義	科目名	福祉サービスの組織と経営	必選区分	選択
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
<input type="checkbox"/> その他 ()					
どのような方法を 取り入れたか	<p>本科目は、社会福祉士国家試験受験科目の一つとして位置付けされている。本学科社会福祉コースへ進んだ大半の学生は履修する科目である。今年度、当該科目で取り上げた工夫は、時間外学習を促す際、①事前学習と②事後学習の充実を図った点である。①授業では、出席する際、事前課題をこなした後、授業へ出席することが必要となっている。その理由は事前課題をこなしておかないと、たとえ授業に出席しても、「ついていけない」ことに加え「グループメンバーに申し訳ない」状況となるからである。授業では、グループ討議する場面が多く、事前課題の取組み状況によってはグループ作業での進捗状況が異なってくる。各グループのメンバーは、事前課題を通じて得た基本情報をもとに、授業内で討議を繰り返す一つの作業を行うこととなる。②事後学習では、個人学習（復習）とグループメンバー同士の作業が中心となる。特にグループメンバー同士の作業においては、授業で出された課題に対し議論を重ね、成果物をもって授業に臨むこととなる。</p>				
取組みの効果	<p>取組みの効果としては主に以下の3点が考えられる。1点目は、事前・事後学習を行うことで授業内での議論が活発化した点にある。活発化した理由は、議論の深まりもさることながら、教科書以外のオリジナルな情報がグループメンバー間で披露されることにより、「さらなる充実」に向けて取組む姿勢が生まれた点にある。2点目は、グループメンバー間同士の「教え合う」作業により、知識定着が進む点である。例えば、授業内では議論をした後、国家試験問題の解いたことがあった。その際、学生同士の声は「正解が見えやすい」とのことであった。3点目は、講義の集中力の高まりである。授業内では、講義と議論とのメリハリが付き、私の講義にしっかりと聴く姿勢が見えた。</p>				
今後の課題	<p>今後の課題は、失敗例ともいえる事柄であるが、事前課題を添削し、次週に返却することが時には困難になることがある。約50名の受講者に対し、一言一句添削をし、コメントを返すのは時間との戦いでもある。一度、このコメントを返すのが間に合わず、授業時に返却できない授業回があった。その授業では、学生の議論が活発化せず、学生からは「事前課題を見ながらでないと話をしづらい」という意見が出た。よって授業において教員は、事前課題を添削し、期日までに返却することが必要であり、その重要性を再認識した。今後は、事前課題の添削内容と時間との整合性をどのように図っていくかが課題ともいえる。</p>				

授業形態	講義	科目名	社会調査法	必選区分	選択
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	毎週授業開始時もしくは授業中に、その週の単元となっている項目について、μ Camを使った小テストを実施し、その累積点を評価に含むこととした。つまり、予習をしなければ小テスト対策は非常に困難であり、既に時間外学習を済ませていることを前提に小テストを含む授業を進めた。				
取組みの効果	当初は講義を最初にしてから、小テストという形にしてほしいという声もあったが、小テストの内容はテキストで指定している範囲を出ないことを強調し、時間外学習を薦めた。すると、ほかの授業とは異なるパターンで気分転換になり、次第に予習する癖がついたという報告が聞かれた。				
今後の課題	期末試験を実施して復習の機会を設け、総合評価に結び付けることを検討したい。				

授業形態	講義	科目名	虐待とソーシャルワーク	必選区分	選択
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約30名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を取り入れたか	虐待対応は法律に基づく介入が基本スタンスとなる。司法的介入の視点で法律（児童福祉法・児童虐待の予防に関する法律）を教えるには、法の説明や解釈を説明しなければならない。しかし、説明が長くなると学生は「眠る」。眠らないための工夫として、以下の手続きをとった。①司法介入に該当する法の番号のみ記入したシートを配布、②4名グループで、2名に一台のパソコンで記入された法の条文を理解し、③虐待対応・介入の流れに沿って、該当する法をホワイトボードに書き出す。④①～③により、法的根拠に基づく虐待対応・介入を理解する。子の作業を通して虐待ソーシャルワークの現状と課題を考察するレポートを宿題とする。				
取り組みの効果	学生は、グループごとに非常に活発に課題に取り組んだ。少なくとも眠っている学生は皆無。グループの協議で解決されない場合は、積極的に教員に質問を行っていた。指定時間内で④まで到達したグループが5グループ中4グループであった。学生が増えたとする司法理解は進んだと思われる。授業後、数名の学生に感想を求めると「先生が一方向的に説明していたら眠る内容」と応えていた。				
今後の課題	学生が苦手とする司法の理解は進んだ。しかし、教員が解説すべき「課題」にまでグループ討議ではいたっていない。レポートによる個人作業となった。Active Learningを実施する際の時間配分と教員の関与（ヒントは出すが、答えを出しすぎない）の方法に課題を感じた。				

授業形態	講義	科目名	神経心理学	必選区分	選択
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約110名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>教員が教壇から動かず、一方的に話すような授業では、教室の後方に着席している学生たちの緊張感が途切れやすく、授業内容の理解不足、あるいはそれによる私語が発生しやすくなる。そこで、この授業では、教員が教室中を絶えず巡回し、歩きながら話すスタイルで授業を進めた。話の中に、学生に考えさせる質問を用意しておき、タイミングを見計らって、その質問を学生全体、あるいは特定の学生に投げかけた。そのさいの学生たち、あるいは学生個人の返答内容を、教員が確認、吟味、強調、賞賛したうえで、その質問に対する教員の考え方を提示した。さらに、教員の考え方を聞いて、それをどのようにとらえるかを学生たちに問いかけた。このような応答的で双方向的な授業を展開した。</p>				
取り組みの効果	<p>教員がいつも歩き回っており、学生にすれば、いつ自分が質問をされるかわからない状況なので、教室の最後列に座っている学生もある程度の緊張感を持って授業に参加していた。そのこともあり、特に注意しなくても私語はほとんどみられなかった。</p>				
今後の課題	<p>受講者全員を巻き込んで議論を展開していくことが理想である。しかし、授業内容に対するももとの関心の程度やこれまでの授業内容の理解程度にかなりの個人差があり、授業内容に関心が高く、理解も進んでいる学生はうまく巻き込めるのだが、そうではない学生はどうしても参加度が低くなり、私語はしない代わりに覚醒水準が低下してしまう様子がみられた。こういった学生のモチベーションをいかに向上させるかが今後の課題である。</p>				

授業形態	講義	科目名	社会保障論B	必選区分	選択
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約80名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	図書館にあるアクティブ・ラーニングの教室に変更し、グループ・ディスカッションの形式を取り入れて、授業展開した(2回)。				
取り組みの効果	ディスカッションのテーマに関する理解度を、各自で確認しながら深めることができた。				
今後の課題	ディスカッションへの参加度に関して、グループ間・グループ内で、バラツキがみられた。				

授業形態	演習	科目名	専門演習 I A・I B	必選区分	必修
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約10名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>発表力と質問力の向上のために、「発表とは」「質問とは」というテーマでレクチャーを行い、発表時の心構えや質問することの意義を伝え、前期よりパワーポイントを使用した発表の機会を積極的に設けた。発表に際しては、数週間前には発表順・司会・タイムキーパー・セッティング係などを学生達自身で相談のうえ決定し、発表当日の運営は全て学生が担う形式で行った。発表については、最初は原稿を見ながらの発表を許可するが、3年次後半には原稿を見ずにスクリーンとフロアだけを見ながら発表できるよう、段階的に条件を厳しくしていった。また質問についても、初期の時点では質問できたこと自体を認め、質問のマナーを中心に適宜指導を行ったが、発表を重ねるごとに、質疑応答が学術的なディスカッションに近づくよう、徐々に質問の内容についての指導も加えていった。なお、4年生の中間報告会・最終審査会にはできるだけ多くのゼミの報告会に参加するよう伝え、その際、発表の内容・形式、質疑応答の内容(要点)について記録する課題シートを予め配付したうえで、全員の提出を求めた。</p>				
取り組みの効果	<p>発表に関する学生全員のコミットメントが高まり、教員が促さなくても学生が自主的に発言するようになった。準備・発表・質疑応答を通して互いの研究への関心や理解が深まり、一人ひとりの卒論研究を皆で協力してブラッシュアップしていこうという仲間意識が生まれた。「発表を聞けば質問するもの」という姿勢は、中間報告会や最終審査会などにおいても発揮され、質疑応答の時間に積極的に挙手し、上級生である4年生に対して堂々と質問をするという姿勢が、ゼミの大半の学生に身に付いた。また、複数の報告会での副査教員の指摘・コメントからの知識や気づきをもとに、ゼミ内でも踏み込んだ議論ができるようになっていった。</p>				
今後の課題	<p>人前での発言が極端に苦手な学生、あるいは自らの質問のレベルに不安のある学生にとっては、「質問しなければならぬ」という状況が苦痛に感じられるかもしれない。個々の学生の特性に配慮しながら、特に対人面や学力面に不安のある学生については個別のサポートやフォローを行ってきたが、そうした学生の「発言・質問することに対する苦痛」を軽減できるような工夫が必要である。</p>				

授業形態	演習	科目名	専門演習 I A・I B	必選区分	必修
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約10名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	ゼミ配属前に提出されていたゼミ志望理由書を全員分配布し、2グループに分かれて、まず、小グループメンバーの理由書について内容の検討を行い、良い点、不足している点の検討を行った。その後、全体シェアリングで、本人がどのようなことをメンバーから指摘されたかを発表した。その後、自分が今後読んでいく文献は何なのか、文献検索の方法をレクチャーした後に、実際に文献検索エンジンを使用して文献を探し、一覧表にすることをを行った。その際、文献の書き方、並べ方についてもレクチャーを行った。その後、図書館でのゼミオリエンテーションを実施し、授業で行った検索以外の検索方法についても学習した。				
取組みの効果	自分の論文へ、メンバーがどのように関心を寄せているかを目の当たりにすることになる。また、いろいろな質問をグループ内で受けるので、発表した本人の卒論テーマへの関心、動機付けが高まり、今後の課題を受け止め、どのような文献を読んで行けば良いのか、方向性が明確になったように思われる。さらに、図書館でのオリエンテーションを経て、文献検索の復習を行うと共に、さらなる学習意欲が芽生えたように思われる。				
今後の課題	卒論テーマの検討は、小グループ内のメンバーに限られており、できるならば、ゼミ生全員の全員で検討し、より多くの意見を貰う方が、本人にとっては有益と思われる。また、否定的な意見を述べて、本人を傷つけないような工夫は必要であるし、褒めすぎても本人によくないので、いかに適切な意見を述べるか、批評と批判、非難との違いとは何かについてなど、基礎学習も必要と思われる。				

授業形態	演習	科目名	専門演習 I A・I B	必修区分	必修
開講学科・学年	大心3年		受講者数	約10名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> その他（ゼミ生の自己理解と相互交流）				
どのような方法 を取り入れたか	<p>武庫女に赴任し初めてゼミを担当するようになってから、少人数クラスにもかかわらず4年生の卒業時になってもゼミ生同士がお互いを十分知り合っていないこと（たとえば、名前ではなく「あの人」などと呼ぶ）に唖然とする体験をした。それ以来、ゼミの時間を卒論に向けた研究・論文の発表や方法論の教授のための授業に使うだけでなく、自分自身を知ることとゼミ生同士で相互交流するためのワークを積極的に組み込むようにした。</p> <p>つまり、研究発表や講義とワークを交互に行い、ゼミ生の卒論指導を進めつつ、自己理解と相互交流を図るようにした。エゴグラムや二十答法などの心理テスト、嘘をつき嘘を見破るワークやMS S M（相互なぐりがき物語作成法）などの相互体験学習、曼荼羅塗り絵などが定番で好評なワークである。</p>				
取り組みの効果	<p>「クラスが同じでもほとんど話したことがなかった同級生と話す機会があってよかった」「単に心理学の知識を習得するだけでなく、心理学に関する様々な体験学習ができ自己理解を深めることができた」と概ね好評である。</p> <p>ただし、社交性に乏しかったり防衛的な学生には、ややしんどいワークもあったかと思われる。</p>				
今後の課題	<p>ゼミ生の中には、自己開示が苦手な学生もいるので、ワークの内容の工夫がさらに必要であると考えている。</p> <p>就活の時期の変更に伴い、早めに卒論に向けた指導が必要になってきているので、ワークを組み込む余裕が少なくなっているのが悩みである。自己理解は、就活にいかすこともできるので両立させながら今後も継続していくつもりである。</p>				

授業形態	演習	科目名	レクリエーションアクティビティ	必選区分	選択
開講学科・学年	大心1年		受講者数	約30名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>授業内容の定着を図るため、毎時間、授業の後半部分で授業で行った経験を振り返り、すべての内容をノートに書き記す方法を取り入れた。</p> <p>学生は、授業ごとに異なる相手と、2人ないし3人のグループに分かれ、授業の振り返りを行う。</p> <p>ノートは、開講期間中に2回提出をさせ、いずれもコメントをつけて返却する。</p>				
取組みの効果	<p>それぞれの授業の中で何を学んだのか整理することができ、授業の振り返りをするこの有用性を指摘することができた。</p> <p>グループワークをすることによって、異なる視点に気づくことが可能となった。</p>				
今後の課題	<p>学生のノートをチェックすると、多くが実技内容を単に書き記すのみで、授業における自分の学びがいかなるものであったかといった、授業の中での新たな発見や、授業の中での疑問の記述はわずかであった。</p> <p>振り返りの方法をもう少し具体的に説明し、次回授業への意欲や関心につながるような働きかけが必要であると思われる。</p>				

授業形態	講義	科目名	心理学概論B	必修区分	選択
開講学科・学年	短心1年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>1. 実際の取り組みについて 学習態度を良くすることと講義内容を理解しやすくするために、次のような取り組みを行った。</p> <p>① 講義開始約30分前に教室に入室する。 ② 出席カードを一人一人に配布する。 ③ 講義に入る前に、学生と教員が挨拶をする。 ④ 前回の講義についての質問に対して、回答する。 ⑤ 前回の講義内容について、振り返る。 ⑥ 前回の講義と今回の講義の関連性について説明する。 以上のことを取り入れた。</p> <p>2. 各取り組みの理由 ①を行った理由は、「講義を遅刻しない」、ことを学生に伝えているため、教員が時間前に行くことで、学生に「講義に遅れない」という意識を高めるために行った。 ②と③を行った理由は、学生一人一人に出席カードを渡すときに、挨拶をすることで、学生と教員の距離を縮めることを目指した。そして、講義前に挨拶をすることで、「これから講義が始まる」ことを意識づけるために行った。 ④、⑤、⑥を行った理由は、講義内容を振り返ることで、講義の復習を行った。そして、今回の講義の流れとともに、講義全体について学生自身が考えるために行った。</p>				
取り組みの効果	<p>今回の取り組みを行うことで、講義中の私語は、ほぼなくなった。また、1時間目の講義にも関わらず、遅刻が減少した。</p> <p>講義内容の理解については、前回の講義を振り返ることで、講義の復習につながった。質問について回答することで、講義が進むにしたがって、質問をする学生や自分で分からないことを調べようとする学生が増えた。</p> <p>時間外学習を促すために、参考資料を紹介していたが、あまり効果は見られなかった。しかし、学生の質問に回答することで、自発的に学習する学生が増えたことも、今回の取り組みの効果として考えられる。</p>				
今後の課題	<p>今回の取り組みを行うことで、講義中の私語や講義に関係のない作業をすることが、減少した。そのため、講義を受ける環境は、良くなったと考えられる。しかし、講義内容の理解を深めることは、まだ不十分な点がある。</p> <p>今後は、講義内容の理解を促進するために、復習だけでなく、予習も行える仕組みを構築することが必要であると考えられる。</p>				

授業形態	講義	科目名	消費者・産業心理学、 恋愛と結婚の科学	必選区分	選択
開講学科・学年	短心2年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>毎回講義の最後の5分間程度を取って書かせている minute paper に、受講した座席の位置を毎回記入させた。場所は、座席をマトリックスの各セルに見立て、列番号 (A、B、C、・・・) と行番号 (1、2、3、・・・) で、例えば B5 (B 列の 5 行目の意味) というように記入させた。</p> <p>座席指定はせず、座席位置は受講生に自由に選択させたが、受講した場所を記入させることにより、出席が「匿名的」なものではなく、当該講義のその時間に確かにそこで受講していたことを自覚させることを目的とした。</p>				
取り組みの効果	<p>座席位置を成績評価に反映させることはしなかった (最初に、学生にそのように伝えた) が、私語などで授業に集中できない学生の名前を把握することができ、受講指導に役立てることができた。また、毎回の座席は記録していたので、座席位置と成績との関係もある程度分析することができた。</p>				
今後の課題	<p>受講学生の人数が多い授業を担当することが多いので、教師から学生への一方的な授業になってしまいがちである。受講生の名前がリアルタイムでわかるようにすることが理想であり、そのためには、座席指定にする、名札等を机上に出させる等の方法もあるが、受講生の参加への自由意思を大切にするためにこのような方法を採用したが、これを双方向的な授業展開へ生かすことが今後の課題と言える。</p>				

授業形態	講義	科目名	リスクと安全の心理学	必選区分	選択
開講学科・学年	短心2年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	リスクマネジメントの解説に際し、より身近で親しみやすい題材を用いることで講義への関心を高め、考えてもらうために、藤子不二雄作「ドラえもん」を使用した。ストーリーを提示しながら、リスクの考え方やリスクに備える方法等についての質問を提示し、受講生に考えてもらった。また、一部の受講生には、回答を発表してもらった。				
取り組みの効果	提示された質問に対して、各人がいろいろな想像をし、取り組んでいる様子がみられた。				
今後の課題	受講生からの回答をもとに、グループディスカッションを実施したり、他の受講生とのディスカッションを通して新しいアイデアを出したりするなど、個人の意見にとどまらず、それを発展させるような取り組みが必要である。それにより、受講生の理解もより深まると期待される。				

授業形態	講義	科目名	介護とリハビリテーション		必選区分	選択
開講学科・学年	短心2年		受講者数		約30名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み					
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み					
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み					
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み					
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み					
	<input type="checkbox"/> その他 ()					
どのような方法を 取り入れたか	<p>全15回講義の中盤にレポート課題を取り入れています。 課題の内容は、次のA、Bのどちらかの課題を1つ選択し、レポートを作成する。 A) インタビュー（身近な介護者＝家族、知り合い等にインタビューを行う） 目的：介護の実際について理解を深める。 質問事項：①介護の体験談、②介護を経験して考えたこと（介護者の思い） 留意点：対象者のプライバシーに配慮し、個人情報レポートに記載しない。レポート提出があることを対象者に伝え、理解を得ること。 レポートは、次の①～③の各項目について記述すること。 ①介護体験の内容、②介護を経験して考えたこと（介護者の思い）③インタビューを終えて（学生自身の学び・気づき） B) 読書（介護体験のある方の著書を読み、レポートにまとめる） レポートは、①本の内容、②印象に残ったこと、③読書を終えて（学び・気づき）の各項目について記述すること。 上記レポートは、提出期限の授業中に回収し成績評価に含まれます。</p>					
取り組みの効果	<p>課題のねらいは、インタビューまたは読書を通じて、在宅介護および施設介護の実際を知り、介護者の喜び、苦しみ、親子関係に対する理解とともに人間の尊厳や未来の介護について学生に考えてもらうことです。年々インタビューを選択する学生が増え、昨年は7割以上の学生がインタビューを行いました。 レポートの感想には、「これまで母に祖父母の介護で苦労したことなど聞いたことがなかったが、今回ゆっくり話を聞くことができ、親の苦労を知った」「介護職の方に聞き、介護が楽しくやりがいのある仕事だということがわかった」「自分自身も将来介護を受ける立場になると思うので、専門的な知識や技術を知っておきたい」などの記述が多く、若者らしい優しさや正義感が感じられる学生が見受けられます。 レポート課題を終えたあとは、親や祖父母の介護の苦労を知ったためか、家で役に立つ知識や技術を授業中に習得しようという意欲が高まっているように感じられます。</p>					
今後の課題	<p>学生にとってはインパクトのある（負担の大きい）課題だと思います。これまではレポート提出で終わりにしていましたが、今後は、インタビュー後のレポートを題材にして、授業中に発表やディスカッションを行ってもらい、双方向型の授業に展開していけば、より学びが深まるのではないかと考えております。</p>					

授業形態	講義	科目名	現代社会と福祉	必選区分	選択
開講学科・学年	短心2年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を取り入れたか	<p>現代社会と福祉では学生が初めて聞く専門用語がほとんどである。シラバスでは事前にテキストを読んでおくこととしているが、ほとんどの学生が読んでいない。この事柄について「どう思いますか？」と問いかけても反応はない。約90人の中で手を挙げて答える緊張感に耐えられないと考える。指名することも考えたがより緊張を深めることになると思い指名は行わなかった。より理解を深めるためには、学生がどの程度理解しているかを知ることが重要だと考え、「この言葉がわかりますか？」との問いかけをするようにしたが、初めは無反応であった。わからないという事を、知らないという事は決して恥ずかしいことではない、そのままにいることのほうが問題だとはなすと、徐々に反応が出てくるようになった。しかし反応してくれる学生は、数名なのが現状である。</p>				
取り組みの効果	<p>学生に解らないことや知らないことは決して恥ずかしいことではないと伝えているが、なかなか浸透しない。約90名の中でいかに発言できるかが課題であるが、いまだ効果が出てこない。より良い方法を模索している。</p>				
今後の課題	<p>小グループでは発言をよくするので、どのような方法があるか模索している。</p>				

授業形態	演習	科目名	初期演習	必選区分	必修
開講学科・学年	短心1年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>パワーポイントを用いたプレゼンテーション演習（後期に8コマを使用）：1コマ約6名の割り当てで、1人あたり10分程度を目安に自由課題でパワーポイントを用いたプレゼンテーション演習を行う。</p> <p>教員がまず具体的な表現の雛形を示し、さらに学生のうち操作に慣れた者と教員が必要に応じて他の学生を指導する。完成したファイルの提出は教員あて、メール添付で発表1週間前までに送信とする（教室でのUSB等媒体による提出を許可しない。これはウイルス対策としても教示する）。期限までに1度提出があれば、それ以降の差し替えは随意とする。当日までの1週間は、取組みの効果に示す諸点の解決期間に充当する。</p> <p>初回の発表者には不公平感がないよう、評価上の加算を与えることを付け加える。スクリーン呈示と口演にとどまらず、具体物の供覧・使用も推奨する（例えばスクリーンボード。場合によりケガ等のないよう注意する）。</p> <p>概要を100字程度でまとめて提出してもらい、テーマと概要を教員が収録整理して、教員も一筆のうえ全員へ取組みの終了後に配布する。</p>				
取組みの効果	<p>学生によりうまく送信できない、サイズが大きすぎる、動画や音声を乗せたつもりがリンクをはっただけだったなどの解決すべき点が生じ、教員とともにこれらへ個々に向き合い、円滑な発表へ結び付けていく。以上のやりとりを通し、1対多の対人コミュニケーションとファイル送受信等に関わる基礎的素養の習熟を図る。</p> <p>また、学生が互いに作成方法を教え、巧拙・感想を述べ合うことで、固定しかけたクラス内の人間関係へ新たな交流の芽を呼び込む。なお、驚くような博識を有する学生がいる一方で、高校から大学1年前期にかけての情報教育にもかかわらず、初歩的な手技が不十分な学生も散見される。後者の発見、ならびに彼女らが失敗できない試練へ対峙する前の、先回り指導の意義が認められる。</p>				
今後の課題	<p>テーマ・内容は問わないものの、それが自らの人となり、生活史、人生と結び付くこと、どうしてそれを選んだのかというナラティブを大切にし、表現してほしいこと（好きだからだけでなく、なぜ好きなのか、同種の○○と何が違うのか）、他方、言って後味が悪そうなことは言わなくていいといった、演習の意義・目指すところや留意点につき時間をかけて予め伝えておく配慮が不可欠である。</p> <p>参加者の興味を引く題目設定や発表の仕方、話題の展開方法などについて、教員より随時・的確に講評する（短所の指摘は級友の前で一切行わず、長所を積極的にクラスの皆と共有する）姿勢が当然ながら肝要で、それらを通していっそう効果的な取組みとなる。</p>				

授業形態	講義	科目名	心理アセスメントの理論と実際	必選区分	選択
開講学科・学年	院臨修1年		受講者数	約10名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	大学院の授業なので、学生はすでに各種心理テストの名称は知っていることが多い。興味があるか知りたいと思っている複数のテストの実物を授業に持ち込み、一部を実体験し、評価まで行うことによって、心理機序の何を図ろうとしているかを討議してもらい、体験型授業を行った。				
取り組みの効果	実体験をすることによって、授業への参加態度が積極的になり、後半の測定していることを討議する箇所においても、積極的発言が見られた。また、1年生の前期なので、同学年の交流を深める機会にもなった。				
今後の課題	15回という限られた時間なので、広義のみの授業に比べて、体験型の授業では時間がかかり、取り上げられる心理テストの数が限られる。参加している学生の興味・関心で体験できるテストに偏りができるので、学生が自主的に他のテストを体験したいと考えた場合、どのような機会を作ればいいのか悩んでいる。				